

# 富津埋立記念館 展示解説書

## (1)富津埋立記念館の概要

- ・富津埋立記念館は、富津沖の埋立事業の完成に伴い、富津の海浜地域に栄えた漁業関係の資料を展示することを目的として設立された施設である。
- ・当記念館は平成5年（1993）年4月27日に開館した。（建設費用約6億円）
- ・現在この建物が建っている場所は埋立地で、昭和53年（1978）4月の埋立工事開始前までは砂浜となっており、春から夏にかけては潮干狩り、冬には海苔養殖が行われていた。
- ・埋立は千葉県企業庁によって行われ（昭和59年竣工）、1402名の組合員が漁業権を放棄し、転業漁民が当記念館の展示品を寄贈した。
- ・建物全体のイメージは、富津に昔から伝わる「すだて漁」をモチーフにして設計されている。「簀立て」とは浅瀬の海に竹などを立てて囲いを造り、魚を生け捕りにする漁法のことであり、建物の平面形態にその形を取り入れている。
- ・また受付ホール上部のドームは富津の砲台をイメージして作られたものである。富津公園内にある「富津元洲砲台」（通称中の島）は明治14年～17年（1881～1884）に築造されたもので、近代以降、東京湾守護のシンボリック的存在となってきたものである。

## (2)富津岬周辺の自然と歴史

- ・東京湾は最も深い中ノ瀬で水深50m前後であるが、とくに富津岬の北側は浅瀬になっており、魚貝類も多い。
- ・富津沖では古来から「江戸前」の漁業が盛んで、マグロ以外の寿司ネタはだいたい採れる。また海苔の養殖が盛んなことでも有名である。
- ・富津岬は沿岸流によって三角形に発達した洲で、東京湾に約6kmほど突き出している。富津岬の砂は小糸川河口と磯根崎から運ばれ、約6千年前の縄文時代前期にはすでにその原形となる州が形成されていたと言われる。
- ・富津岬周辺には原始古代からの多くの遺跡が散在しているが、中でも富津市役所建設に伴って調査された下飯野の打越遺跡では弥生時代後期～古墳時代前期（約1800～1600年前）の住居跡約320軒が検出された。この遺跡からは網のおもり（土錘）が多数出土しており、水田耕作が開始されてからも、漁業が主要な生業であったことを物語っている。
- ・また富津岬の北側の付け根付近には「内裏塚古墳群」と呼ばれる総数50基近くの古墳群があって、南関東最大規模の内裏塚古墳（全長144m）を始めとする5世紀～6世紀の大形古墳が集中しており、古代の「須恵の国」の繁栄を物語っている。
- ・富津市南部の上総湊地区には大湊横穴群（7世紀）があり、その壁面には船の線刻画が描かれていて、古墳時代から大形の構造船が東京湾を行き来していたことがわかる。
- ・富津市内の遺跡や古墳に関しては富津公民館内の「ふるさと展示室」に展示している。



## B. 富津の潜水漁業

### (1)富津潜水漁の歴史

- ・ヘルメット式の潜水器具を身につけて行う平貝（タイラギ）の採取は、明治 35 年（1902）に、富津新町の斉藤徳蔵によって始められ、「富津潜り」と呼ばれるようになった。この漁法は現代にも引き続き受け継がれている。
- ・大正～昭和初期にかけては、地浦の平貝の潜水漁は入札による特定者の操業となり、大嵩定吉（ダイサダ）・大嵩幾造（バッテラ）が中心となって 2～4 隻の船で行われた。
- ・富津の潜水業はその始まりから昭和 22～23 年頃までは平貝とミル貝漁が主であった。
- ・とくに昭和 18 年（1943）には平貝が大繁殖し、組合の出荷事業となった。戦時中には、出征家族にも平貝漁一代分（一人前）の報酬を与えてその生活を支えた。
- ・昭和 24 年～25 年頃になると平貝の資源減少によって個人採りとなり、見習い（通称予科練）の潜水士が腕を上げて独立するなど、昭和 26 年には潜水漁船が 80 隻以上に達した。
- ・昭和 27 年には乱獲による共倒れを防止するため、潜水漁は県の免許制・許可制となった。
- ・昭和 30 年頃になると、平貝は地浦にはほとんどいなくなり、中ノ瀬が主な漁場となった。中ノ瀬の平貝漁は昭和 30 年代中頃が最盛期であったが、同漁場は水深が 35m 位と深く、誰でもが潜れたわけではなかった。
- ・平貝の漁場が深場に移ると、潜水病が続発し、あるいは資源の減少によって採算がとれず、減船・転業が相次いで、潜水漁船も 60 隻ほどに減少した。
- ・昭和 40 年代に入ると、様々な要因で海底環境も変わり、平貝はほとんど採れなくなってしまった。それに代わって昭和 40 年代初頭には赤貝が湧き、また寿司ネタとしてのトリ貝の商品価値が見直されて、40 年代には赤貝・トリ貝が潜水漁の中心となった。

### (2)現在の潜水漁と潜水器具の改良

- ・昭和 49 年、大嵩弁三が潜水業としてアサリの採取を開始し、商品化された。
  - ・昭和 50 年代以降、現在までの富津の潜水漁業は、地浦でのアサリ・バカ貝の採取を中心に 50 隻ほどの潜水漁船によって個人事業（組合に分金を支払う）として行われている。トリ貝については商品化できるほどの収穫があるものの、赤貝は採取量も減っている。
  - ・ヘルメット式潜水器具は始業期と外見上はそれほど大きく変わっていないが、現在に至るまで次のような改良が加えられてきた。
- ① 船上から潜水夫へ空気を送る装置が、当初は手押し式ポンプであったが、平貝の豊漁であった昭和 18 年頃から動力によるエアーコンプレッサーに変わった。
  - ② 船上と潜水士との交信が、当初は命綱による合図で行われていたが、昭和 40 年頃から電話器による通信に変わった。
  - ③ 潜水服の材質が綿から化学繊維になり、ゴムの質も良くなった。
  - ④ ヘルメットに電灯を取り付け、より深く暗いところまで潜れるようになった。
  - ⑤ アサリ・バカ貝の採取はポンプの水圧で貝と砂を飛ばし、網に収める方法になった。

## C. 富津の漁船と漁法

### (1) 漁船の種類

**潜水船**～ヘルメット式潜水器具を使ってアサリ・バカ貝などの潜水漁（かつては平貝・ミル貝漁）に使う船（明治～現代）

**底引き船**～底引き網を機械で縦方向に引いて、海の中を回遊する魚や貝を捕る船（昭和 30 年代～現代）

**のり採り伝馬船**～海苔ヒビ・海苔網から海苔を採取する船（大正～昭和 30 年代）

**押し送り船**～海上で各種の漁船から魚貝類を買い付けて築地まで運んだ船。魚の鮮度を保つために船の中央に水槽が設けられていた。魚の買い取りに当たっては、船前方の左右に置かれた目銭置が利用され、時価で取り引きされた。（明治～昭和初期）

**打瀬船**～帆を上げて風の力で船を横に流しながら、袖網の付いた打瀬網を使って漁を行った船（明治～昭和 30 年頃）

**巻き網船**～通称「あぐり船」と呼ばれ、2 隻で網を掛け回してイワシなどの魚を捕獲した（明治～現代）

**延べ縄一本釣船**～延べ縄でタイ・クロダイ・コチなどを捕る船（明治～昭和 40 年代）

### (2) 網の種類と漁法

**ころばし網漁**～潮流の早い所（第一海堡と第二海堡の間など）で、潮の流れを利用して網を転がしながらイシガレイなどを捕る漁法（昭和 40 年代まで）

**延べ縄漁**～1 本の糸（天蚕糸）に多数の針を付け、タイ・クロダイ・トラフグ・コチなどの魚を捕る漁法（昭和 40 年代まで）

**潜水器漁**～ヘルメット式潜水器具を付け貝類を採る漁法で、明治期～昭和 20 年代までは平貝・ミル貝が、現在ではアサリ・バカ貝が主に採取されている

**あぐり網漁**～2 隻の巻き網船で網を掛け回してイワシ・スズキ・ヘシコ・イナボラなどを捕る漁法（現在でも実施）

**打瀬網漁**～底引き網の一種で、ふくろ網の両方に袖網を付け、風力や潮力を利用して船で海底を引き、車エビやカニその他の魚を捕る漁法（昭和 30 年頃まで）

**蛸壺漁**～紐の付いた蛸壺を海底に仕掛けておいて、ネズミ捕り方式でタコを捕る漁法

**腰巻き漁**～腰に帯を巻いてマングワ（馬鋏）を取り付け、アサリ・バカ貝を掻き採る漁法

**見突き漁**～箱メガネで海底にいる魚を見定めて、ヘシ（フォーク状の槍が付いた長い竹の棒）でカレイ・ヒラメなどの魚を突き捕る漁法

**一本釣り漁**～伝馬船・一本釣り船からタイ・スズキ・コチなどの魚を捕る漁法

参考文献 『富津の漁業史』（昭和 56 年・1981） 『富津水産捕採史』（平成 7 年・1995）

漁業史聞き取り調査協力者：平野正美・勝 一郎・大嵩信吉・小坂一夫

本文編集：小沢 洋 監修：松本庄次 平成 16 年(2004) 8 月 3 日作成・9 月 29 日改訂版